

エホバよ汝必此ふべき者なり汝之夫亦汝の名にその權威のために大なり 汝輩國の王たる者よ誰か汝を畏れざるべきや汝を畏るべきと當然ありと之國のすべての博士たちのうちおもしろの諸國のうちにも故に比ふべき者なればなり 彼らにみ赤野のごとくまた痛患あり 或る者の教に惟木のみ 大なるより携へし銀箱はバベロンより携へし金銀箱と鑄匠の作りし物なり 青と紫をりの衣となすは是とすて巧なる細工人の工作なり エホバの眞の神なり彼が活る神なり永遠の王なり其怒によりて地は震ふ 萬國はりの憤怒にあたること能はず 汝等かく彼らにいふべし天地を造らざりし諸神は地の土よりこの天の下より失ざらん と エホバの能をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てりての明哲をもて天を舒べたまへり されば天に乘る水よりかれ雲を地の極よりくだし電を雨をおとし風をその府庫よりいだす すべての人々の如くおとして 匠にして鑄匠の作りし像のため 身をばらす 其鑄らざる像を偶像にしてその中に靈魂を吹き入れん 是らして虛き者にして迷妄の工作なり 其罰せらるべきに滅ぶべし ヤコブの分は是のごとくから 彼の遺物と遺物と主なり イラエルの遺業の樹なり その名を萬軍の エホバといふなり 國中に坐する者よ 汝の包を地より取りおげよ エホバかくいひたまふよ 我々この地にすめる者を此度擲たん 且かれらをしてめめかやまして擲べし 汝らに汝らにわれ毀傷をまく 嗚呼 われ之を顧みんか 我を傷を重し我にいふて汝を以て之に悩む患難なり 汝を以て之にわれ毀傷をまく 汝が細察し恐る斷れ 我我子の心をすてゆきて居すなり 汝幕屋を張る者か 汝が帷をかくる者か 牧者に愚にして エホバを求めず故に利達するの群をみか散り 及び風あり 北の國より大なる騒きたる是エホバの諸邑を荒して出吠の巢とあはせん ○ エホバよわれ知る人の途は自己によらず 且歩む人は自ら

耶利米亞記 第十三章

1	出十五 十一 節八十六
2	出十五 四
3	申十五 六
4	申十五 九
5	申十五 十四
6	申十五 十六
7	申十五 十八
8	申十五 二十
9	申十五 二十二
10	申十五 二十四
11	申十五 二十六
12	申十五 二十八
13	申十五 三十
14	申十五 三十二
15	申十五 三十四
16	申十五 三十六
17	申十五 三十八
18	申十五 四十
19	申十五 四十二
20	申十五 四十四
21	申十五 四十六
22	申十五 四十八
23	申十五 五十
24	申十五 五十二
25	申十五 五十四
26	申十五 五十六
27	申十五 五十八
28	申十五 六十
29	申十五 六十二
30	申十五 六十四
31	申十五 六十六
32	申十五 六十八
33	申十五 七十
34	申十五 七十二
35	申十五 七十四
36	申十五 七十六
37	申十五 七十八
38	申十五 八十
39	申十五 八十二
40	申十五 八十四
41	申十五 八十六
42	申十五 八十八
43	申十五 九十
44	申十五 九十二
45	申十五 九十四
46	申十五 九十六
47	申十五 九十八
48	申十五 一百
49	申十五 一百零二
50	申十五 一百零四
51	申十五 一百零六
52	申十五 一百零八
53	申十五 一百一十
54	申十五 一百一十二
55	申十五 一百一十四
56	申十五 一百一十六
57	申十五 一百一十八
58	申十五 一百二十
59	申十五 一百二十二
60	申十五 一百二十四
61	申十五 一百二十六
62	申十五 一百二十八
63	申十五 一百三十
64	申十五 一百三十二
65	申十五 一百三十四
66	申十五 一百三十六
67	申十五 一百三十八
68	申十五 一百四十
69	申十五 一百四十二
70	申十五 一百四十四
71	申十五 一百四十六
72	申十五 一百四十八
73	申十五 一百五十
74	申十五 一百五十二
75	申十五 一百五十四
76	申十五 一百五十六
77	申十五 一百五十八
78	申十五 一百六十
79	申十五 一百六十二
80	申十五 一百六十四
81	申十五 一百六十六
82	申十五 一百六十八
83	申十五 一百七十
84	申十五 一百七十二
85	申十五 一百七十四
86	申十五 一百七十六
87	申十五 一百七十八
88	申十五 一百八十
89	申十五 一百八十二
90	申十五 一百八十四
91	申十五 一百八十六
92	申十五 一百八十八
93	申十五 一百九十
94	申十五 一百九十二
95	申十五 一百九十四
96	申十五 一百九十六
97	申十五 一百九十八
98	申十五 二百
99	申十五 二百零二
100	申十五 二百零四

エホバよりエレイキヤにのちめる言いふ 汝らこの契約の言をきく エホバの人とエホバにすめる者に告よ 汝かれらに語れ イラエルの神 エホバかくいひたまふよ この契約の言に遵とざる人ハ祖とせる 此の契約ハわが汝らの先祖をエホバの地獄の中より導き出せし日にかれらに命ぜしものなり 即ち我いひけり かつら我聲をきく 我汝らに命ぜし諸の事に従ひて行て 汝ら我民とかり 我の汝らの神とやらん 我汝らの先祖に乳と蜜の流るる地を與へんと誓ひしことを成就んと期す 今日のごとくしこの時我々たへてアムンエホバといへり またエホバ我にいひたまひけるハ汝等此等の言をエホバの諸邑とエホバの地より導き出せし日より今日にいたるまで 切に彼らを戒め擧げて 汝ら我聲に遵とていへり 然と彼らより導き出せし日のより今日にいたるまで 切に彼らを戒め擧げて 汝ら我聲に遵とていへり 我ににいひたまひけるハエホバの人々 エホバに居る者の中に 叛逆の事あり 彼らに我言をきくこととを好まざりしとせよ 汝らの先祖の罪にかへり 亦他の神に從ひて之に奉へたり イラエルの家とエホバの家をわがらの列祖たちと締たる契約をやられり この故にエホバかくいひたまふよ 我れ災禍をかれらにくださん 彼らこれを見ざるべし 彼ら我をよ公とも我聽じ 汝の邑とエホバに居る

耶利米亞記 第十一章

1	申十五 六
2	申十五 九
3	申十五 十二
4	申十五 十五
5	申十五 十八
6	申十五 二十一
7	申十五 二十四
8	申十五 二十七
9	申十五 三十
10	申十五 三十三
11	申十五 三十六
12	申十五 三十九
13	申十五 四十二
14	申十五 四十五
15	申十五 四十八
16	申十五 五十一
17	申十五 五十四
18	申十五 五十七
19	申十五 六十
20	申十五 六十三
21	申十五 六十六
22	申十五 六十九
23	申十五 七十二
24	申十五 七十五
25	申十五 七十八
26	申十五 八十一
27	申十五 八十四
28	申十五 八十七
29	申十五 九十
30	申十五 九十三
31	申十五 九十六
32	申十五 九十九
33	申十五 一百零二
34	申十五 一百零五
35	申十五 一百零八
36	申十五 一百一十
37	申十五 一百一十二
38	申十五 一百一十四
39	申十五 一百一十六
40	申十五 一百一十八
41	申十五 一百二十
42	申十五 一百二十二
43	申十五 一百二十四
44	申十五 一百二十六
45	申十五 一百二十八
46	申十五 一百三十
47	申十五 一百三十二
48	申十五 一百三十四
49	申十五 一百三十六
50	申十五 一百三十八
51	申十五 一百四十
52	申十五 一百四十二
53	申十五 一百四十四
54	申十五 一百四十六
55	申十五 一百四十八
56	申十五 一百五十
57	申十五 一百五十二
58	申十五 一百五十四
59	申十五 一百五十六
60	申十五 一百五十八
61	申十五 一百六十
62	申十五 一百六十二
63	申十五 一百六十四
64	申十五 一百六十六
65	申十五 一百六十八
66	申十五 一百七十
67	申十五 一百七十二
68	申十五 一百七十四
69	申十五 一百七十六
70	申十五 一百七十八
71	申十五 一百八十
72	申十五 一百八十二
73	申十五 一百八十四
74	申十五 一百八十六
75	申十五 一百八十八
76	申十五 一百九十
77	申十五 一百九十二
78	申十五 一百九十四
79	申十五 一百九十六
80	申十五 一百九十八
81	申十五 二百

者ハゆきての香を焚き神を蝕んざれば是等ハうの災禍の時にして絶てかれを救ふてどわらじヨギム汝の神の數ハ汝の邑の數のごとし且汝らエルサレムの衢にまたらふて耶ベき者に壇をたてたり即ちバアルに香を焚きてわれを怒らせたりヨホババ我に知せたまひけれバ我れを知るの時かなむ彼らの作爲を我に定めしたまへり我ハ我に承れて宰られにゆく羔のごとく彼らガ我をうつてなしたるにて謀を命ずる知す彼らハいふに我ら樹などの果をを共に滅さんかれを生ずる者の地より絶てのの名を人に忌むしむべしと議き輔をかしたる人の心腸を察りたまふ萬軍のヨホババ我れを訴はんに汝にのべたればわれを去て汝が彼らに仇を報すを見せしめたまへ是をもてヨホバアトエラの人々につきてかくいひたまふ彼等汝の生命を取んと索めて言ふ汝エホバの名をもて預言する勿れ恐らん我我らの手ハ死んぞ故キ萬軍のヨホババかくいひたまふみや我かれらに罰すべし壯丁ハ劔を死にりの子女ハ飢饉に死なれり餘る者かかべし我れ災をアトエラの人にとりきたらしめわが彼らに罰するの年をきたらまめん

經 ヨホババわが汝を争ふ所に汝ハ義と惟われ輔の事につきて汝と言言人惡人の途のさか之停れる者のみ亦福なるハ何故ぞや汝かれらを植たり彼らハ根づき成長て實を結べりの口ハ汝に近けよ

レ 申三〇七廿六
カ 耶二四九
ハ 耶二四八
ニ 耶二四七
三 耶二四六
四 耶二四五
五 耶二四四
六 耶二四三
七 耶二四二
八 耶二四一
九 耶二四〇
十 耶二三九
十一 耶二三八
十二 耶二三七
十三 耶二三六
十四 耶二三五
十五 耶二三四
十六 耶二三三
十七 耶二三二
十八 耶二三一
十九 耶二三〇
二十 耶二三九
二十一 耶二三八
二十二 耶二三七
二十三 耶二三六
二十四 耶二三五
二十五 耶二三四
二十六 耶二三三
二十七 耶二三二
二十八 耶二三一
二十九 耶二三〇
三十 耶二三九
三十一 耶二三八
三十二 耶二三七
三十三 耶二三六
三十四 耶二三五
三十五 耶二三四
三十六 耶二三三
三十七 耶二三二
三十八 耶二三一
三十九 耶二三〇
四十 耶二三九
四十一 耶二三八
四十二 耶二三七
四十三 耶二三六
四十四 耶二三五
四十五 耶二三四
四十六 耶二三三
四十七 耶二三二
四十八 耶二三一
四十九 耶二三〇
五十 耶二三九
五十一 耶二三八
五十二 耶二三七
五十三 耶二三六
五十四 耶二三五
五十五 耶二三四
五十六 耶二三三
五十七 耶二三二
五十八 耶二三一
五十九 耶二三〇
六十 耶二三九
六十一 耶二三八
六十二 耶二三七
六十三 耶二三六
六十四 耶二三五
六十五 耶二三四
六十六 耶二三三
六十七 耶二三二
六十八 耶二三一
六十九 耶二三〇
七十 耶二三九
七十一 耶二三八
七十二 耶二三七
七十三 耶二三六
七十四 耶二三五
七十五 耶二三四
七十六 耶二三三
七十七 耶二三二
七十八 耶二三一
七十九 耶二三〇
八十 耶二三九
八十一 耶二三八
八十二 耶二三七
八十三 耶二三六
八十四 耶二三五
八十五 耶二三四
八十六 耶二三三
八十七 耶二三二
八十八 耶二三一
八十九 耶二三〇
九十 耶二三九
九十一 耶二三八
九十二 耶二三七
九十三 耶二三六
九十四 耶二三五
九十五 耶二三四
九十六 耶二三三
九十七 耶二三二
九十八 耶二三一
九十九 耶二三〇
一百 耶二三九

もろの心ハ汝亦適ざかるヨホバ汝われを知り我を見たまわが心の汝にむかひて何なるかを試みたまへ羊を宰りに宰いだすごどく彼を牽いだし殺す日の爲にかれらるをうなへたまへいつまでこの地ハ哭きすべての畑の蔬菜ハ枯るべけんやこの地に住る者の惡によりて畜豎と鳥ハ滅びざる彼らハ我らの終をみざるべし汝もも歩行者ごどもに擣てつかれ赤べいかで騎馬者ご嬭えんや汝平安安かる地を恃まざいかでヨルダの傍の叢に居ることせんや汝の兄弟ごあちの父の家も汝を欺きた大警をわけて汝を退ふかれらたまはしく汝を語るごどもこれに信する勿れヨホバ我家を離れわが産業をすて邪靈の魂の愛する所の者よの敵の手にわたせりわが産業ハ林の獅子のごとく我にむかひて其體を揚ぐ故にわれ之を悪めり我産業ハ我におけると班敵ある鳥のごとく亦や鳥之を圍むにあらざる野のすべこの聖地ハ荒たり聖滅者ハ野のすべての聖山のうへに来れりヨホバの劍地のこの極よりの極までを滅ぼすばべて血氣ある者ハ安を乞ふ彼らハ麥を播て荆棘をかゝる勢れごも得るとごころをかじけらの作物のために恥るにいたらん是ヨホバの烈き怒によりてありヨホバイスラエルの民に嗣しむる産業をせむごどころのすべてのわが惡き隣にむかひてヨホバかくいふみやわが彼等をの地より拔出したまふヨホバの家を彼らの中より拔出すべしわれ彼らを出せしめしちたれ彼らを恤みてわが其産業にかへし各人よそのの地に歸らしめん彼等も我民の道をもなひ我名をさしてヨホバハ活くと誓ふて我を民を教へてバアルを捨て誓ふて去れし如くせれば彼らハわが民の中に建らんべしされば彼らもし聽かざる

レ 耶二〇三
ニ 耶二〇二
三 耶二〇一
四 耶二〇〇
五 耶一九九
六 耶一九八
七 耶一九七
八 耶一九六
九 耶一九五
十 耶一九四
十一 耶一九三
十二 耶一九二
十三 耶一九一
十四 耶一九〇
十五 耶一八九
十六 耶一八八
十七 耶一八七
十八 耶一八六
十九 耶一八五
二十 耶一八四
二十一 耶一八三
二十二 耶一八二
二十三 耶一八一
二十四 耶一八〇
二十五 耶一七九
二十六 耶一七八
二十七 耶一七七
二十八 耶一七六
二十九 耶一七五
三十 耶一七四
三十一 耶一七三
三十二 耶一七二
三十三 耶一七一
三十四 耶一七〇
三十五 耶一六九
三十六 耶一六八
三十七 耶一六七
三十八 耶一六六
三十九 耶一六五
四十 耶一六四
四十一 耶一六三
四十二 耶一六二
四十三 耶一六一
四十四 耶一六〇
四十五 耶一五九
四十六 耶一五八
四十七 耶一五七
四十八 耶一五六
四十九 耶一五五
五十 耶一五四
五十一 耶一五三
五十二 耶一五二
五十三 耶一五一
五十四 耶一五〇
五十五 耶一四九
五十六 耶一四八
五十七 耶一四七
五十八 耶一四六
五十九 耶一四五
六十 耶一四四
六十一 耶一四三
六十二 耶一四二
六十三 耶一四一
六十四 耶一四〇
六十五 耶一三九
六十六 耶一三八
六十七 耶一三七
六十八 耶一三六
六十九 耶一三五
七十 耶一三四
七十一 耶一三三
七十二 耶一三二
七十三 耶一三一
七十四 耶一三〇
七十五 耶一二九
七十六 耶一二八
七十七 耶一二七
七十八 耶一二六
七十九 耶一二五
八十 耶一二四
八十一 耶一二三
八十二 耶一二二
八十三 耶一二一
八十四 耶一二〇
八十五 耶一一九
八十六 耶一一八
八十七 耶一一七
八十八 耶一一六
八十九 耶一一五
九十 耶一一四
九十一 耶一一三
九十二 耶一一二
九十三 耶一一一
九十四 耶一一〇
九十五 耶一一九
九十六 耶一一八
九十七 耶一一七
九十八 耶一一六
九十九 耶一一五
一百 耶一一四

我かあらずかゝる民を全く拔出して滅すべしとエホバのひたせし
 言を聞きしエホバはかくいひたまへり汝ゆきて麻の帯をかひ汝の腰にむすべ水に入る勿れ
 われすあて
 ちエホバの言に遵ひ帯をかひてわが腰にむすべり
 エホバの言ふたゞが我がにのみて云ふ
 汝が買て腰
 にむすべる帯を取り起てユフラテにゆき彼處にてこれを盤の穴にかくせと
 こゝに飛てわれエホバの命
 じたまひし如く往てこれをユフラテの涯にかくせり
 おほくの目を經しちエホバが我がにひたまひける
 起てユフラテにゆきわが汝に命じて彼處にかくさためし帯を取れと
 われすあてちユフラテにゆき帯
 を我隠せしどころより掘取しにりの帯ハ柄て用ふるにたへず
 ちたエホバの言われにのみて云ふ
 エ
 ホバかくいふ我がかくの如くエホバの驕傲とエホバの大なる驕傲をやがらん
 この惡き民わが言を聽
 ことをふみ己の心の剛愎なるにたがひて行か且他の神を拜ひてこれにつかへ之を拜す彼等ハ此帯の
 用ふるにたへざるが如くなるべし
 エホバの人の腰に附てごとくわれユフラテのすべての家と
 ユフラテのすべての家を我に附しめ之を我民となし名どかし譽どかし樂となさんせり然るも彼等ハさかぎ
 りき
 故に汝の言を彼らに語るべし
 エホバの神エホバかくいふ酒壺に入管酒盈つと彼汝にこた
 へていはん我佛豈酒壺に酒の盈ることを知らんやと
 其時汝かれらにいふべし
 エホバかくいふみやわ
 れ此地に住するすべての者とエホバの位に坐する王等と祭司と預言者よびエホバに住するすべての者
 に罰を盈せ
 彼らと此と彼と打あせて碎かん父と子をも然すべし
 われ彼らに恤せず惜せず憐れみせずして
 滅さん
 汝らさけけ耳を傾けよ驕る勿れ
 エホバがかたりたまふあり
 汝らの神エホバに眞いまだ暗を起した
 ちばさざる先汝らの足のくらき山に躓かざる先
 汝ら警戒を取すべし
 汝ら光明を望まんにエホバの之を死の蔭に

一 耶一六〇九
 二 耶一六〇九
 三 耶一六〇九
 四 耶一六〇九
 五 耶一六〇九
 六 耶一六〇九
 七 耶一六〇九
 八 耶一六〇九
 九 耶一六〇九
 一〇 耶一六〇九
 一一 耶一六〇九
 一二 耶一六〇九
 一三 耶一六〇九
 一四 耶一六〇九
 一五 耶一六〇九
 一六 耶一六〇九
 一七 耶一六〇九
 一八 耶一六〇九
 一九 耶一六〇九
 二〇 耶一六〇九
 二一 耶一六〇九
 二二 耶一六〇九
 二三 耶一六〇九
 二四 耶一六〇九
 二五 耶一六〇九
 二六 耶一六〇九
 二七 耶一六〇九
 二八 耶一六〇九
 二九 耶一六〇九
 三〇 耶一六〇九
 三一 耶一六〇九
 三二 耶一六〇九
 三三 耶一六〇九
 三四 耶一六〇九
 三五 耶一六〇九
 三六 耶一六〇九
 三七 耶一六〇九
 三八 耶一六〇九
 三九 耶一六〇九
 四〇 耶一六〇九
 四一 耶一六〇九
 四二 耶一六〇九
 四三 耶一六〇九
 四四 耶一六〇九
 四五 耶一六〇九
 四六 耶一六〇九
 四七 耶一六〇九
 四八 耶一六〇九
 四九 耶一六〇九
 五〇 耶一六〇九
 五一 耶一六〇九
 五二 耶一六〇九
 五三 耶一六〇九
 五四 耶一六〇九
 五五 耶一六〇九
 五六 耶一六〇九
 五七 耶一六〇九
 五八 耶一六〇九
 五九 耶一六〇九
 六〇 耶一六〇九

變へ之を昏黒となしたまふわたらん
 汝ら若これに聽すバ我靈魂ハ汝らの驕を隠するところに悲まん
 又エホバの罰の擗めらるるによりて我目いたく泣て涙をながすべし
 かんち王と太后につげよ汝ら自ら
 ら謙りて坐せり
 汝らの美き髮あんから首より落べけれん
 南の諸邑ハ閉てこれを啓く人あし
 汝ら各攜移され盡くどらへ移さる
 汝ら目を擧て北より來る者を見よ
 汝ら賜はりし群汝のうるはしき
 群といつこにわるや
 かれ汝の親女馴たる者汝の上にて
 首領とあさんとき汝何のいふまきとあ
 らんや
 汝の痛ハ子をむ
 婦のごとく
 さらざらんや
 汝心のうち
 何故にこの事我わきたるや
 といふか
 汝の罪の重によりて
 汝の裾ハ掲げられ
 かんちの踵ハあらざらん
 汝らオピア人の膚をかへるか
 豹の斑駁をかへるか
 若これを爲し
 文ハ惡に慣たる汝らも善をなし得べし
 故にわれ彼らを罰して野
 の風に吹散さるる
 皮壳のごとくせん
 エホバのいひたまふごとく
 汝の得べき分わが量て汝にわたふる
 產業あ
 ぬ
 汝我をわすれて
 虚假を依頼ハあり
 故わわれ汝の前の裳を剥きて
 汝の羞耻をあらとさん
 われ汝の姦
 淫と汝の嘶と汝が岡のうへと野になせし
 汝の亂淫の罪と汝の憎むべき行をみたり
 エホバは汝ハ恥か
 るか
 汝の裸くせらるるに
 何いづくの時に經べきや
 一 乾旱の事ホつきて
 エホバの言ハ左のごとし
 エホバハ悲むの門ハ傾
 びき
 地をたふれて
 哭く
 エホバはレムの叫ひ上る
 うの僕伯等ハ僕をつかへして
 水を汲しび
 瓶ら井をいたれ
 ども
 水を見ず
 空き器をもちて
 歸り
 恥かつ憂ひて
 うの首をおほふ
 地も雨ふらずして
 土燥裂たるもより農
 夫ハ恥て首を掩ふ
 また野に
 なる塵ハ子をうみて
 之を棄つ
 草あければあり
 野の驛馬ハ霍山のうへにた
 ちて
 山犬のごとく
 嚼ぎ
 草あきによりて
 目眩む
 エホバは
 汝の罪をなすども願くハ

一 耶一六〇九
 二 耶一六〇九
 三 耶一六〇九
 四 耶一六〇九
 五 耶一六〇九
 六 耶一六〇九
 七 耶一六〇九
 八 耶一六〇九
 九 耶一六〇九
 一〇 耶一六〇九
 一一 耶一六〇九
 一二 耶一六〇九
 一三 耶一六〇九
 一四 耶一六〇九
 一五 耶一六〇九
 一六 耶一六〇九
 一七 耶一六〇九
 一八 耶一六〇九
 一九 耶一六〇九
 二〇 耶一六〇九
 二一 耶一六〇九
 二二 耶一六〇九
 二三 耶一六〇九
 二四 耶一六〇九
 二五 耶一六〇九
 二六 耶一六〇九
 二七 耶一六〇九
 二八 耶一六〇九
 二九 耶一六〇九
 三〇 耶一六〇九
 三一 耶一六〇九
 三二 耶一六〇九
 三三 耶一六〇九
 三四 耶一六〇九
 三五 耶一六〇九
 三六 耶一六〇九
 三七 耶一六〇九
 三八 耶一六〇九
 三九 耶一六〇九
 四〇 耶一六〇九
 四一 耶一六〇九
 四二 耶一六〇九
 四三 耶一六〇九
 四四 耶一六〇九
 四五 耶一六〇九
 四六 耶一六〇九
 四七 耶一六〇九
 四八 耶一六〇九
 四九 耶一六〇九
 五〇 耶一六〇九
 五一 耶一六〇九
 五二 耶一六〇九
 五三 耶一六〇九
 五四 耶一六〇九
 五五 耶一六〇九
 五六 耶一六〇九
 五七 耶一六〇九
 五八 耶一六〇九
 五九 耶一六〇九
 六〇 耶一六〇九

汝の名の爲に事をかき給へ我儕の違背いおほいなり我儕汝を罪を犯したり イエラエルの企望なる者うの觀るどきに撒ひたまふ者よ汝いかなれば此地を棄てて他邦人のごとくし一夜宿の旅客のよとくしてたふや汝いかにあれたるを人のごとくし救をなすこと能はざる勇士のごとくしたるよ公やエホバよ汝の我らの間にいます我儕の汝の名をもて稱へらるる者あり我ら棄たまふ勿れ ○エホバこの民にかくのひたまへり彼らかく好んでさまよひ其足を禁めざりてエホバ彼らを憐れみ其の徳をおぼへ其罪を罰すべし エホバまた我わひたまひける民の汝の民のため思をいゆる勿き彼ら嚼食するども我らの呼籲をさかす燔祭と素祭を獻るども我をうけし却てわき劍と鐵櫃と疫病をもて彼らを滅すべしわをいひけるのみ嗚呼士エホバよみよ預言者たちこの民にむかひ汝ら劍を見ざるべし鐵櫃の汝らにきたらしむ此處に鞏固なる平安を汝らにあたへんとせり ○エホバ我わひたまひける預言者等ハ我名をもて詭を預言せりわれ之を遣ひたまふ命せたまふ之わは汝らハ虚詭の默示とト虚を虚きてと己の心の詐を汝らに預言せり この故にかの吾が遣ひたるに我名をもて預言して劍と鐵櫃この地をきたらしむいへる預言者等につきてエホバかくいふこの預言者等ハ劍と鐵櫃を滅するべし また彼等の預言をうけし民ハ鐵櫃と劍をよみてエラサレムの街に擲棄らざらんことを講る者なかるべし彼等どの妻よび其子らの女みな然りうい汝彼らの惡をうの上本斷けななり 汝この言を從らに語るべしわの目ハ夜も書もたはす涙を流さんうハ我民の童女大ある滅び重き傷によりて亡ざるるはなり われ出て如にゆくに劍に死者あり我邑わにに鐵櫃を擲むものわり預言者も祭司もみなうの地をさまよひて知ることなし ○汝ハ我を惡くすてたさふ汝の心ハシャツをきらふや汝いかなるに我儕を擧て愈しめざるか我ら

千二百十五
千二百十四
千二百十三
千二百十二
千二百十一
千二百十
千二百九
千二百八
千二百七
千二百六
千二百五
千二百四
千二百三
千二百二
千二百一
千二百
千二百一
千二百二
千二百三
千二百四
千二百五
千二百六
千二百七
千二百八
千二百九
千二百十
千二百十一
千二百十二
千二百十三
千二百十四
千二百十五

平安を望めども善くぞわらふ双鷹ざる時を望むし却て恐懼あり ○エホバよ我らハかの惡く先祖の徳を知るわざら汝を罪を犯したり 汝の名のために我ら棄たまふ勿き汝の位を辱めたまふ勿き汝のわらに立し契約をおぼえて毀りたまふなかし異邦の虛き物の中雨を降せざるものあるや夫かつから白雨をくだすをえんや我らの神エホバが汝を爲したまふわらずや我ら汝を望むら汝すべし此等を惡く作りたまひたさばなり ○エホバ我にいまたまひけるたたとエホバが前あたつども我を我の斯民を願するべしかれらを我前より逐ひていでざらしめよ 彼らもし汝にわれ何處にいざらんやといはし汝彼らにエホバかくいへり死を定められたる者ハ死にいたり劍に定められたる者ハ劍にいたり鐵櫃に定められたる者ハ鐵櫃にいたり斷を定められたる者ハ斷にいたるべしと ○エホバ云たまひけるわれ四の物をもて彼らを罰せんす亦はち劍をもて斷せたまふて墜せ天空の鳥よ及び地の豐をもて食ひ滅さしめん またニダの王ヒセキヤの子マサセがエラサレムになせし事によりわれ彼らをして地のすべての國に難をうけしめん ○エラサレムよ誰かなんちを憐れんたれか汝のため嘆かんな誰かちかづきて汝の安否を問えん ○エホバのひたまふ汝をすたり汝退けり故にわれ手を汝のうへに伸て汝を滅さんわれ懼る倦り われ風扇をもて我民をこの地の門に煽かんかれら其途を離れざるによりて我らの子を絶ち彼らを滅すべし 彼らの寡婦ハわが前本海濱の沙よりも多し書われはるばる者携へきたりて彼らと壯者の母とをせめ驚駭と恐懼を突然にかれのうへにおさへん 七八の子をうみし婦ハ衰へて氣乏之尙書あるにの日ハ早く汝ら彼ら辱められて面をあらめん其餘ざる者ハわれ之をうの敵の劍に付さんと

千二百十六
千二百十五
千二百十四
千二百十三
千二百十二
千二百十一
千二百十
千二百九
千二百八
千二百七
千二百六
千二百五
千二百四
千二百三
千二百二
千二百一
千二百
千二百一
千二百二
千二百三
千二百四
千二百五
千二百六
千二百七
千二百八
千二百九
千二百十
千二百十一
千二百十二
千二百十三
千二百十四
千二百十五
千二百十六
千二百十七

ホバいひたまふ。馬呼わむ。神あるか。我母よ。汝が故に我を生じよ。全國の人我と争ひ我を攻む。われ人亦貸さず。人また我に貸さず。皆我を誣ふなり。エホバ。いひたまひける。我實に汝に益をなせしめんため。に汝を憫す。我まことに敵をして。ろの輿のとき。災の時に。汝を求むる。ことをなせしめん。鐵のいで。北の鐵。と鋼を碎かんや。われ汝の資産と。汝の寶財を擄掠物と。ならしめ。價をうる。こと亦から。去めん。是汝のすべて。の罪よ。あるなり。すべて汝の境のうち。にかくなさん。わき汝の敵をして。汝を汝の讎に。地に。と。へ。移ざしめん。夫我怒。おより。て。火燃。之。な。た。ち。を。燃。んと。する。なり。エホバ。よ。汝。これ。を。知。り。た。ま。ふ。我。を。憶。之。我。を。か。へ。り。み。たま。へ。我。を。追。害。す。る。もの。に。仇。を。復。した。ま。へ。汝。の。容。忍。お。よ。り。て。我。を。ど。ら。へ。ら。れ。去。む。勿。れ。我。汝。の。爲。に。辱。を。受。る。を。知。り。た。ま。へ。われ。汝。の。言。を。得。て。之。を。食。へ。り。汝。の。言。わ。か。ぬ。心。の。欣。喜。休。樂。な。り。萬。軍。の。神。エ。ホ。バ。よ。わ。き。汝。の。名。を。も。て。稱。へ。ら。る。く。あり。わ。き。壇。築。者。の。會。に。坐。せ。ず。又。喜。ば。ず。又。汝。の。手。に。よ。り。て。獨。り。坐。す。汝。の。憤。怒。を。も。て。我。に。充。した。ま。へ。り。何。故。に。わ。が。痛。り。息。す。わ。が。傷。り。重。く。し。て。愈。さ。る。か。汝。を。わ。き。に。お。け。る。と。水。を。た。も。た。ず。し。て。人。を。欺。く。溪。河。の。で。ど。く。な。る。や。○。是。を。も。て。エ。ホ。バ。か。く。い。ひ。た。ま。へ。り。汝。も。し。歸。ら。ば。我。また。汝。を。か。へ。ら。し。め。て。我。前。に。立。し。め。ん。汝。も。し。應。を。す。と。責。を。い。だ。さ。ば。我。口。の。で。ど。く。な。ら。ん。彼。ら。の。汝。に。歸。ら。ん。さ。ざ。し。汝。の。彼。ら。に。か。へ。る。勿。れ。わ。き。汝。を。この。民。の。前。に。堅。き。鋼。の。牆。と。さ。ん。か。き。ら。汝。を。攻。る。と。も。汝。に。か。た。受。る。べ。し。ろ。の。わ。き。汝。と。偕。に。あり。て。汝。を。た。す。け。汝。を。救。へ。ば。なり。と。エ。ホ。バ。い。ひ。た。ま。へ。り。我。汝。を。惡。人。の。手。よ。り。救。ひ。ど。り。汝。を。怖。る。べ。き。者。の。手。よ。り。放。つ。べ。し。

エホバの言。また。我。に。の。み。て。い。ふ。汝。の。處。に。て。妻。を。娶。る。な。か。れ。子。女。を。得。る。な。か。れ。此。處。に。生。る。く。子。女。と。この。地。に。之。を。生。む。母。之。を。生。む。父。と。に。就。て。エ。ホ。バ。か。く。い。ひ。た。ま。ふ。彼。ら。の。慘。し。き。痛。に。死。

○節三十一
○節三十二
○節三十三
○節三十四
○節三十五
○節三十六
○節三十七
○節三十八
○節三十九
○節四十
○節四十一
○節四十二
○節四十三
○節四十四
○節四十五
○節四十六
○節四十七
○節四十八
○節四十九
○節五十

己我ま。手。舉。り。ま。す。乎。して。曠。土。の。で。ど。く。に。田。地。の。面。に。お。ら。ん。また。劍。と。鐵。鏢。に。滅。び。ま。す。其。屍。の。天。空。の。鳥。と。地。の。獸。の。食。物。と。な。らん。エホバ。か。く。い。ひ。た。ま。へ。り。聽。か。る。家。に。い。る。勿。を。ま。た。往。て。之。を。哀。嘆。く。勿。を。う。め。わ。き。我。本。安。と。思。懼。と。矜。恤。を。この。民。よ。り。取。ば。な。り。と。エ。ホ。バ。い。ひ。た。ま。へ。り。大。なる。者。も。小。び。ぎ。者。も。この。地。に。死。む。じ。彼。ら。の。罪。を。あ。ら。す。た。彼。ら。の。た。め。に。哀。む。者。な。く。自。ら。傷。む。者。な。く。髪。を。う。る。者。な。か。る。べ。し。また。の。哀。む。と。き。パ。ツ。を。さ。び。ぎ。て。其。死。者。の。た。め。に。之。を。慰。む。る。もの。亦。く。又。父。あ。る。ひ。口。母。の。た。め。に。慰。藉。の。杯。を。彼。ら。に。飲。し。む。者。な。か。る。べ。し。汝。また。筵。宴。の。家。に。い。り。て。偕。に。坐。し。て。食。飲。す。る。勿。を。萬。軍。の。エ。ホ。バ。イ。ス。ラ。エ。ル。の。神。か。く。い。ひ。た。ま。ふ。視。よ。汝。の。目。の。前。汝。の。世。に。在。る。と。き。に。わ。れ。欣。喜。の。聲。と。歡。樂。の。聲。と。新。婦。の。聲。と。を。此。處。に。絶。じ。めん。汝。の。す。べ。て。の。言。を。擧。民。に。告。る。と。き。彼。ら。汝。に。問。ふ。て。エ。ホ。バ。わ。き。ら。を。責。て。この。大。なる。罪。を。示。した。ま。ふ。何。故。や。ま。た。彼。ら。に。何。の。惡。事。あ。る。や。わ。が。神。エ。ホ。バ。に。背。き。て。わ。き。ら。の。か。せ。し。罪。何。を。や。せ。い。と。い。ひ。た。ま。ふ。汝。か。き。ら。も。答。ふ。べ。し。エ。ホ。バ。い。ひ。た。ま。ふ。是。汝。ら。の。先。祖。わ。き。を。棄。て。他。の。神。に。從。ひ。て。ま。を。奉。へ。て。ま。を。拜。した。我。を。す。て。わ。が。律。法。を。守。ら。ざ。り。し。よ。る。汝。ら。の。汝。ら。の。先。祖。よ。り。も。多。く。惡。を。な。せ。り。み。よ。ら。み。汝。ら。の。か。の。自。己。の。惡。き。心。の。脚。帳。な。る。お。ま。た。が。ひ。て。我。に。き。か。ず。故。に。わ。れ。汝。ら。を。此。の。地。よ。り。逐。ひ。て。汝。ら。と。汝。ら。の。先。祖。の。讎。さ。る。地。に。いた。ら。し。め。た。汝。ら。か。し。て。お。て。晝。夜。ほ。か。の。神。を。奉。へ。ん。是。わ。が。汝。ら。を。憐。れ。ま。さ。る。に。よ。る。な。り。と。エ。ホ。バ。い。ひ。た。ま。ふ。然。ば。み。よ。此。後。イ。ス。ラ。エ。ル。の。民。を。エ。シ。ア。の。地。よ。り。導。き。い。だ。せ。し。エ。ホ。バ。の。活。く。と。い。ふ。こ。と。な。く。し。て。イ。ス。ラ。エ。ル。の。民。を。北。の。地。と。う。す。べ。て。逐。や。ら。ま。し。地。よ。り。導。出。せ。し。エ。ホ。バ。の。活。く。と。い。ふ。日。きた。ら。ん。我。ら。を。我。ら。の。先。祖。と。共。に。お。ま。は。ら。し。か。き。ら。の。地。に。導。き。か。へ。る。べ。し。○。エ。ホ。バ。い。ひ。た。ま。ふ。み。よ。我。ら。か。は。く。の。漁。者。を。よ。び。來。り。て。彼。ら。を。漁。ら。せ。ま。た。の。後。か。は。く。の。獵。者。を。呼。來。り。て。彼。ら。を。諸。の。山。も。ろ。の。岡。

○節一
○節二
○節三
○節四
○節五
○節六
○節七
○節八
○節九
○節十
○節十一
○節十二
○節十三
○節十四
○節十五
○節十六
○節十七
○節十八
○節十九
○節二十
○節二十一
○節二十二
○節二十三
○節二十四
○節二十五
○節二十六
○節二十七
○節二十八
○節二十九
○節三十
○節三十一
○節三十二
○節三十三
○節三十四
○節三十五
○節三十六
○節三十七
○節三十八
○節三十九
○節四十
○節四十一
○節四十二
○節四十三
○節四十四
○節四十五
○節四十六
○節四十七
○節四十八
○節四十九
○節五十

九節三〇七 一節三〇六

十節三〇七 二節三〇六

十一節三〇七 三節三〇六

十二節三〇七 四節三〇六

十三節三〇七 五節三〇六

十四節三〇七 六節三〇六

十五節三〇七 七節三〇六

十六節三〇七 八節三〇六

十七節三〇七 九節三〇六

十八節三〇七 十節三〇六

十九節三〇七 十一節三〇六

二十節三〇七 十二節三〇六

二十一節三〇七 十三節三〇六

二十二節三〇七 十四節三〇六

二十三節三〇七 十五節三〇六

二十四節三〇七 十六節三〇六

二十五節三〇七 十七節三〇六

二十六節三〇七 十八節三〇六

二十七節三〇七 十九節三〇六

二十八節三〇七 二十節三〇六

二十九節三〇七 二十一節三〇六

三十節三〇七 二十二節三〇六

三十一節三〇七 二十三節三〇六

三十二節三〇七 二十四節三〇六

三十三節三〇七 二十五節三〇六

三十四節三〇七 二十六節三〇六

三十五節三〇七 二十七節三〇六

三十六節三〇七 二十八節三〇六

三十七節三〇七 二十九節三〇六

三十八節三〇七 三十節三〇六

三十九節三〇七 三十一節三〇六

四十節三〇七 三十二節三〇六

あよび岩の穴より獵ひださしめん 我目にかれるの語の途を鑿る者我わかゆるとこそなり又その悪り
 我目に塵れざるあり わきまつ倍して其惡どうの罪に報いたるの汚きたる者の尻をもて我地を
 汚しうの惡びべきものをもて我産業に充せむあり ○ エホバが私の力我の城難の時の逃難を萬國の民に地
 の極より汝きたりわれらの先祖の福なるどころの者い惟誠と虚浮事と益なき物のみかりといはん 人
 豈神にあらざる者をこれらの神となすべけんや 故にみよわれ此度かれらに知らせむとこそなり九節
 ち我手と我能をかれらに知らせめん彼らに我各の エホバあるを知らべし

望み野 二 ヌアの罪ハ鐵の筆金剛石の尖をもてまらされうの心の碑と汝らの祭壇の角に鑄らるゝなり
 彼らハアノの子女をかよく如く青木の下に高岡のうへなるの祭壇とアシラを造りて 我れ野に在
 るわが山と汝の資産と汝のもろくの財産および汝の四方の境の内なる汝の罪を犯せる崇邱を掃掠物と
 からせめん わが汝にあたりて汝の手をばなされ汝をして汝の讎する地に於て汝の敵につ
 かへしめんやハ汝ら我をいからせて眼なく燃ゆる火を發したまはなり ○ エホバがかくひたたまふはよ
 人を得み肉をうの臂とし心にエホバを離る人ハ詠るべし 六 彼ハ荒野に乘られたる者のでとくらん彼ら
 善事のきたるをみす荒野の燥きたる處離るどころ人の住さる地に居らん 七 おほよる エホバをたのみユ
 ヌアを其侍する人ハ禱なり 八 彼の水の傍に植たる樹のおとくもかろん其根を河にのべ炭薪きたるも恐る
 るどころなしろの葉ハ青く亢旱の年にも憂ひみずして絶す果を結ぶべし 九 心の萬物よりも偽る者にして甚
 だ惡し誰がこれを知らんや 十 われエホバハ心腹を察り腎臓を試みおのゝ其途に順ひの行爲の
 果によりて報ゆべし 十一 鳩鳩のふのれを生きて卵をいやくが如く不義をもて財を獲る者あり其ハ人命の年

にてここに離れうの終に思ふる者さかん 樂の位より高き者より高き者 聖所たる者 イスラエルの望
 みるエホバよすべて汝を離るる者ハ土に躓され此の此のける水の源なるエホバ
 を離るるよによる ○ エホバよ我を置きたまへ然らば我を救ひたまへばらば我救えし汝ハ
 祈るものあり 彼らにいふエホバの言ハ何にわらふや之をのすまめよと 我ら救者の職を埋か
 ずして汝にきたるに又禱の日を嘱はざりき汝てまを知らしめし我をよりいづる者ハ汝の面の前にあり
 汝我を懼まむる者さたりたまふ勿き禱の時に汝にわが遺擲あり 我を破る者を辱めたまへ我を辱しむ
 るあかれ彼らを悔しめし我を悔しめし汝はなかなか我禱の日を彼らに來らしめ滅亡を倍してこそを滅し
 たまへ ○ エホバ我にかくひたせまら汝ゆきて エヌの王等の出入する民の門およびエヌの諸の
 門にきて 彼らにいふ此門より入るとそのエヌの王等とエヌのすべての民とエヌカラムに住るすべての
 の者よ汝ハエヌの言をきけ 九 エホバがかくひたせまら汝ら自ら憤め安息日に荷をたづさへてエヌカラム
 の門に在る勿き 又安息日に汝らの家より荷を出し勿き 諸の仕事をなす勿き 我ら汝らの先祖に命せしむ
 るく安息日を聖くせよ 十 わきと彼らに遺する耳を傾けたまはるの項を強くして聽す訓をうけざるなり
 エホバのいひたまふ汝らもし讀んで我にきき安息日に荷をたづさへてこの邑の門にいらば安息日を聖く
 して諸の仕事をなさず 十一 艾ビサの位に坐する王等汝らエヌの民エヌカラムに住る者車と馬に乘
 てこの邑の門よりいなることを之ん此邑にハ限なく入すまらん 又人々エヌの邑とエヌカラムの四周
 およびニサヤの地と平地と山と南の方よりきたり 燐祭機性素祭馨香調祭を携へてエホバの堂
 へいらん され汝らも我を聽すして安息日を聖くせよ 安息日をたづさへてエヌカラムの門にい

十一節三〇七 十二節三〇六

十二節三〇七 十三節三〇六

十三節三〇七 十四節三〇六

十四節三〇七 十五節三〇六

十五節三〇七 十六節三〇六

十六節三〇七 十七節三〇六

十七節三〇七 十八節三〇六

十八節三〇七 十九節三〇六

十九節三〇七 二十節三〇六

二十節三〇七 二十一節三〇六

二十一節三〇七 二十二節三〇六

二十二節三〇七 二十三節三〇六

二十三節三〇七 二十四節三〇六

二十四節三〇七 二十五節三〇六

二十五節三〇七 二十六節三〇六

二十六節三〇七 二十七節三〇六

二十七節三〇七 二十八節三〇六

二十八節三〇七 二十九節三〇六

二十九節三〇七 三十節三〇六

三十節三〇七 三十一節三〇六

三十一節三〇七 三十二節三〇六

三十二節三〇七 三十三節三〇六

三十三節三〇七 三十四節三〇六

三十四節三〇七 三十五節三〇六

三十五節三〇七 三十六節三〇六

三十六節三〇七 三十七節三〇六

三十七節三〇七 三十八節三〇六

三十八節三〇七 三十九節三〇六

三十九節三〇七 四十節三〇六

四十節三〇七 四十一節三〇六

四十一節三〇七 四十二節三〇六

四十二節三〇七 四十三節三〇六

四十三節三〇七 四十四節三〇六

四十四節三〇七 四十五節三〇六

四十五節三〇七 四十六節三〇六

四十六節三〇七 四十七節三〇六

四十七節三〇七 四十八節三〇六

四十八節三〇七 四十九節三〇六

四十九節三〇七 五十節三〇六

あよび君の穴より獵ひださしめん 我目にかれるの語の途を鑿る者我わかゆるとこそなり又その悪り
 我目に塵れざるあり わきまつ倍して其惡どうの罪に報いたるの汚きたる者の尻をもて我地を
 汚しうの惡びべきものをもて我産業に充せむあり ○ エホバが私の力我の城難の時の逃難を萬國の民に地
 の極より汝きたりわれらの先祖の福なるどころの者い惟誠と虚浮事と益なき物のみかりといはん 人
 豈神にあらざる者をこれらの神となすべけんや 故にみよわれ此度かれらに知らせむとこそなり九節
 ち我手と我能をかれらに知らせめん彼らに我各の エホバあるを知らべし